

巻 頭 言

Koyo Way - Production Process Innovation - 「継続可能」なモノづくりのコアとなる「PPI」の考え

Koyo way - Production Process Innovation -
The Idea of "PPI" — Core Part of "Sustainable Development"

常務取締役

宗 真臣

M. SO



ダボス会議を主催した世界経済会議は102ヶ国を比較した「2003年世界競争力報告」を公表した。首位はフィンランドで2年前に最悪の21位まで沈んだ日本は2年連続で順位を上げ11位まで戻した。葛藤を続ける日本のモノづくりも潮目とも言うべき時期にきていると指摘される方々も多く、たいへん力づけられる。当社も、我々のモノづくりへの考え方や姿勢がKoyo Wayとして確信できるまで、後一步のところに来たと思う。

1. 日本中心のモノづくりへの回帰と コア技術の「見える化」

国際競争とグローバル化の波にさらされる中、完成品メーカーの競争力強化の方向は、再編と統合からブレイクスルーと融合へ劇的に変化しつつある。モノをつくる工程や部品構成そのものを根底から変えてしまおうとする潮流に乗るためには、コア技術の「見える化」と「見究め」が、たいへん重要であると思われる。そして、コア技術の「自前技術」化こそが流出しつつある日本のモノづくりを回帰させる事につながるのだと考える。

当社の主力製品であるベアリング・ステアリングとメカトロ製品群の強さの秘密は、一つの製品をつくるために、さまざまな技術を複合化している点にある。ステアリングで言えば機械技術に加え、電子や制御技術が必要であり、ベアリングには精密技術に加え、材料・潤滑や化学技術までが複合化している。複合化した技術は進化する可能性が高い。進化の核となる技術要素を「見える化」し、それを進化させる我々の意思こそが、大切なものになるのだと確信できるまで、「見究め」なければならぬと思う。

2. モノづくりの進化への課題、 「継続可能」

一方では日本を代表するモノづくりの現場で火災事故が相次いでいる。合理化が進みベテランの経験や勘を数値に置き換え、現場の人数を減らしてきた結果だろうか？モノづくりの進化を「継続可能」という点から考えると、コア技術の「見究め」がますます難しい。モノをつくる喜びや思想まではマニュアル化できないと思われる。

コンピュータのコピキタス(ラテン語で「どこでも」)化が「どこでも」使えるという環境をもたらし、個々の企業・工程では負担の大きなことを最小のコストで実現できるようになってきている。製品に製造と品質の記録を持たせる生産技術が実現できれば、モノをつくる「思い」まで製品に作り込めるようになるのではないだろうか？

3. 「継続可能」なモノづくりの進化を もたらす「PPI」の考え方

顧客重視の施策において、開発のみならず製造部門までが顧客の製品を知ること、モノづくりの総合力はますます進化している。当社でも総合的に営業から設計・生産技術、製造の現場にいたるまでコア技術の「見える化」を行い、磨きをかける「PPI」の活動を全社展開している。現場・現物・現実に基づいた対話と理解、さらには理念(基本)がたいへん重要であることを一つ一つのテーマへの取り組みの中から学びつつある。このように技術の融合の場を創り出し続けることに志を新たに組みたい。